

大會所感の記事を讀みて

關西の一會員

大會々場のアトモスフィヤの直觀がやがて筆になりて十二月號に掲載されたので自分は早速之を讀んだ。さうして全く意外の感に打たれた。それは同じ會場と同じ空氣の中に三日間を過して同じ問題に觸れ同じ事柄に接し同じ聲を聞いた一人／＼の感じや批判が餘りに違つて居ると云ふことである。然し同一物に對する各個の感じは必ずしも一致すると限つたものでもなければ殊に主觀的要素の多い我々大人の感じと云ふものが殆んど千差萬様であるといふことから考へれば、その違つて居るといふことに就いてこれを心理的にいへば何の不思議もなければ疑問もない。然し自分は自分としての考を披瀝して教を受くることは必要であると考ふるにより、失禮とは存じながら左に申上げて見たいと思ふ。

大會に於て主催者が殊に至れり盡せりの準備と待遇とには感謝の辭なき位に感じたるは出席者の誰れしも同感なりしならんと思ふ。諮問案討議題の成り

行きは各人各様にて思はぬ結果の現はるゝも亦群集心理によりて支配さるゝためである。斯る大會合には無理ならぬことゝ思ふの外はない。それは會員の眼界の狭いのもなければ自分の頭の間違ひでもない時には會員の多數が婦人であるために議事法に馴れず可否贊同が明瞭でなかつた爲めに思はぬ結果に終つたことも多かつたであらう。だれも／＼長閑なる樂園に生活する時とは自から氣分の異なるのも無理からぬことであるとは思はれるが、それはそれとして前號の大會所感を載せられた出席者の一人はどうも東京のお方らしく直觀されるので關西の會員はどうしても一言辯じないわけにはいかぬと思ふことがある。今回の問題は不思議にも東京よりは一題も出てゐない。關東にては静岡、小田原より討議題。研究發表には福島縣より一題がある斗り、第一回の幼稚園關係者大會は東京フレブル會の主催にて東京女高師にて開かれ第二回は京阪神戸市にてお受けする

ことになつた。以上東京は第一回の發起者であるから第二回に對しても充分なる御同情を寄せられるのが至當であると思ふのに今回には一題をも提出されず出席者も亦非常に僅少なるは實に情ないことゝ感じたのである。東京は申す迄もなく我國の首都であり女教師はあり日本幼稚園協會はあり幼児教育の中心であつて載かなければならないと思ふのに、此の冷淡さを考へると實に我が國の幼児教育の爲めに痛嘆の外はない。

今回の提出問題が「早教育ニ酔サル」と御感じになつたり「幼稚園ノ仕事ハ知的教育ヲ主トスル所ナリノ下ニ議論シタ」とお考へになつたならば夫れは大なる間違である。三市聯合保育會では數年前から人格問題や優良の感情の養成方法如何などいふ問題もでゝ感情意志の方面を初め心身の各方面に就いても論議せられてあつたが各問題を一時に研究する事が出来ない爲めに文字の問題が去年の三市聯合會の時に残りしを續けて研究する事になつた爲めに、今回の大會に提出するに至つたのである。折柄富山、廣島方面より同じ様な問題が偶然にも集つた。併し主催者側ではなるべく他府縣の方々の御提出を尊重

する意味で重複した様な問題をも採用せられたと聞いて居る。其のために知識に偏した教育を問題とする事が多かつた事と思はれる。知識の研究をしたから知識の教育ばかりに偏するといふこともなく要するに順々に爲し易きことより研究は始めらるゝに違ひない。乍併出席者の一人者が幼児の情意陶冶が知識の教育よりも重大なることを絶叫して我國の幼児教育者に至大の注意を喚起して下さつたことは實に感謝すべきことゝ思ふ。

「日々遭遇スル末梢ノ問題ハ實際家が適切ニ感ズルコトガ多イカラ實際家同志ガ相談スル事トシテ夫レヨリ前ニモツト〜根本ニ觸レタ問題ニ就イテ相談シテ頂キタイ」

この出席者の一人の御注文は至極御尤のことである夫れも結構であるが末梢の問題、根本問題とはいつたい如何なる事であらうか、哲學、思想等の問題ならばいざ知らず、生活か教育かといふ様な大問題を承つても之を實行する場合には生活夫れが教育であるから兒童の生活を破壊しない様にと思ふても時によりて教育をしなければならぬ場合がある。

保母の人格によりて子供が感化されるのが眞の保

育だと云ふことは根本問題に違ひない。兒童の神性を發達させるといふも根本問題に違ひない。年齢に應じた身體の發達、手技の研究、言語、數の觀念等の様に分類された種々の事柄は末梢であらうか。子供の日常の生活からいへば僅かなる一つの行動も決して末梢とは考へられない小さき者こそ大なる價值あるものと思はれるのである、如何のものであらうか。

『十有餘園ヲ參觀シテ千差萬別其ノ園ソノ人ノ人格ノ現ハレテ有ル』ことを御考へになつて『根本問題ガマダ解決サレテ居ラヌ』との御説を承つて私はいよいよ根本問題について分らなくなつたのである。自分はいつも思ふに教育とは教育者と被教育者との心の接觸である。凡てが人格の感化であると、若し之が違はぬとすれば各園各人の理想の實現は却つて保育の進歩向上を促すものではないであらうか。

『一方幼兒ノミヲ相手トシテ居ラル、専門家ニ在ツテハ對象物が常ニ手答ヘノナイ幼兒デアル爲メニ旺盛ナル力ヲ現ハスニハ餘リニ物足ラズ其ノ力ヲ研究ニ注グ様ニ成ル事ハ當然ノ事デアル』この御言葉を承はるに至つて實に呆然たらざるを得ないので

ある。想ふに出席者の御一人は實際教育に従事しておいでになる方ではないに相違ない。却つて前に攻撃して居らるゝ幼稚園管理者か又は机上の理論家に相違ないと思はれる(誤らば御許しを乞ふ)。なせなれば眞に幼兒を愛し其の幼兒を教育し様と思ふ人の口からはどうしても斯かる情ない言葉は出るものではない。餘り幼兒を無視した言葉である。保育研究者を侮辱した言葉である。何が故に研究するかをも御存じない御言葉であると思ふ。申すまでもないが私共關西に於て熱心に研究したいと思ふて居るのは其の様な「精力過剰ノヤリ場ノ爲メ」にするのでも兒童を方便に使つて學者ぶるためでもない。

私共が研究しやうとして居ることは私共が日常接して居る幼兒を一個の人格者の萌芽として考へる時にはこれを知育、情育と別々にして考へる事は出来ないものである。幼兒といへども彼にふさはしき感情が動き、幼稚ながらも自然物に對し人事に對する知識の欲求を持つて居る其の多數の子供を圓滿に教育しなければならぬ故に之を教育するには保姆と幼兒の日常の接觸、即ち人格の接觸に於てのみ初めて實を擧げることが出来るのであつて直觀力の鋭敏な純

なる幼児に接する保母は、須らく自ら人格の向上をはかり至醇の生活をもつて幼児に接することが肝要であるが、一面に於ては彼等のもてる能力を如何に保護發達させ、盛んな活動力を如何に満足させ様かといふことについては現在の幼稚園教育に於ては遺憾ながら私共は満足して居られないのである。少しの無理も矛盾もなく極めて自然的の發達をさせ様とする處に、研究の必要を感じるのである。即ちその無理のない教養の道は、保育者自身が充分に生理的原則を知り發生の心理學に依りて而かもプラグマチイズムとアイディアリズムの兩極が調和統一された思想によらねばならぬ。そこで、私共は如何に保育者としての使命を自ら確認し深い信念をもつて全力を傾注して此の道にたづさはつても、此の原則を知らずに暮らすならば子供達に何の幸福を與へ得るであらうか。何の効果を奏するであらうか。學者の研究はむしろ原理、原則を見出すための研究であるが、實際家は子供の日常の動作や心状をつぶさに觀察し一人や二人についての觀察に依りて常識的判斷をなすことなく、出来る丈多くのものによりて根據ある普遍的の事實を見出して教育の方針や方法を自らク

リエートしなければならぬのであつて、精力の餘裕をもつて、學者の領域を占領するといふ臆測を離れて、眞に根據ある保育の實を擧げること、それこそ文部省諮問案の幼児各年齢に適切なる保育事項如何に答ふる眞の科學的の答案を得る次第である。今一つは日頃接する各個の幼児を比較研究するに非ざれば、各個性の長短を知ること能はず、保育の最も大切なことは兒童の一人／＼の遺傳性、環境等を充分に知悉して之に適する保護、保育をすることである。私共の研究は此の如き意味に於て行はれるのである。

『誠ヲ以テブツツカッタラ不満足ルコトハナイ』
この御言葉は御尤も千萬にて誠を以つてぶつつかる時に始めて研究が起るので、末梢の事柄にても忽がせにせざる處に眞の愛がある、研究があると思ふのである。私は大會に於ても、モット／＼眞の研究があればよいと切望した次第で、さうすれば此の大會はより以上に有益であつたに相違ないと思はれたのである。